



特
3149
2

兎姓こしやう酒さけよ来きて阿あ蘇そ松しょうよあひて賀いらい儀ぎを演あそぶ
 洗せんね小こ我わが威いが震ふるる荒あらい尾お虎とら橋はしがはどり残のこ人の儂ゆる畫えま
 へこもつたため壓おさ倒たきて個おの々づ色いろがうーかひ萎しな々々と一いつて
 へと羞はにか澁しぶ黙もく一いつ居ゐたて那あの荒あらい尾お虎とら橋はしは自おと来より肚はら裏うら惡わる死し人ひと小
 て日ひ比ぢ阿あ蘇そ松しょうと睦むつまじうらぬうへ今いましも偶ぐうと上じやう首しゆ尾
 が出で来きて拜らい賜みせしふんぞいとい誇こほりふるあの面つら洗せんきこて
 惡わる泪なみだけもとたまりかぬて旁わがはた輩たぐひよむひ適とく間かん君きみ侯こうの御ご意い小
 香かう爐ろう峯ほうの雪ゆきはいふと仰おほせし禪ぜん家けのこぬる問もん答たと云いふの
 ぬると阿あ蘇そ松しょうぬ一いつ誤ご心しん得とくて蕪わ子こが捲ませらまじ偶ぐう中ちゆう
 といふものなりか一いつふけまど君きみ侯こうよもそと出で来きせしこ
 御ご恩おん賞しょうの底そこ事ことぞかの清せい女によが簾すだまじ一いつの雪ゆきよて詩しの意いし



かかへて。今日の御前ごぜんの花はなあり。樂天らくてんが詩うたも香爐かうろ峯ほうの花はな
 とはいとず。かゝる齟齬そごよてあせしハ。中ちゆうさバ鹿相かそうといふものし
 そまが物怪ものけの僥倖えんじやうとぬ。不意ふい首尾しゆびせしハ。察さつをとるところ。方かた
 丈ぢやう小せうハ龍陽りゆうやうの肚裏はらあり。中ちゆうハ胡論ころんハ執成しやくじやうまうとき。這奴こゝろハ悦えつ
 をせたるもの。おらん。惣そうじて佩刀はいたうハ下くださる。ハ一番いちばん鏡かみハ一番いちばん登のぼ
 うのとき。ふこそあつべけ。但たゞ外がわハた。不ふし。めし。もあること。う。さる
 奴やつ己おのれハ分際ぶんげいとも弁べんまへど。御辞退ごじたいまう。寸法すんぽうもあつぬ。默もく呆だう。
 何なにハともあも。雪ゆきと花はなの區別くわつべつと。不ふ會かい得た文盲ぶんまうの。不ふど。傍疼はうていし
 と。苦晒くせつハかせ。餘あまの兒こ姓せいども。執しやく妬たく。かり。ふ。とり。ふ。て。汝なんぢ和わ
 余唱朝よあさと。謝あやまる。小せうど。阿蘇松あそまつハ。いと。う。ら。羞はづら。ひ。不ふど。し。汗あせハ
 める心地こころハ。は。蝸牛かまゆひの角つのめ。だ。ち。て。こ。が。上うより。お。と。り。天てんハ。いと

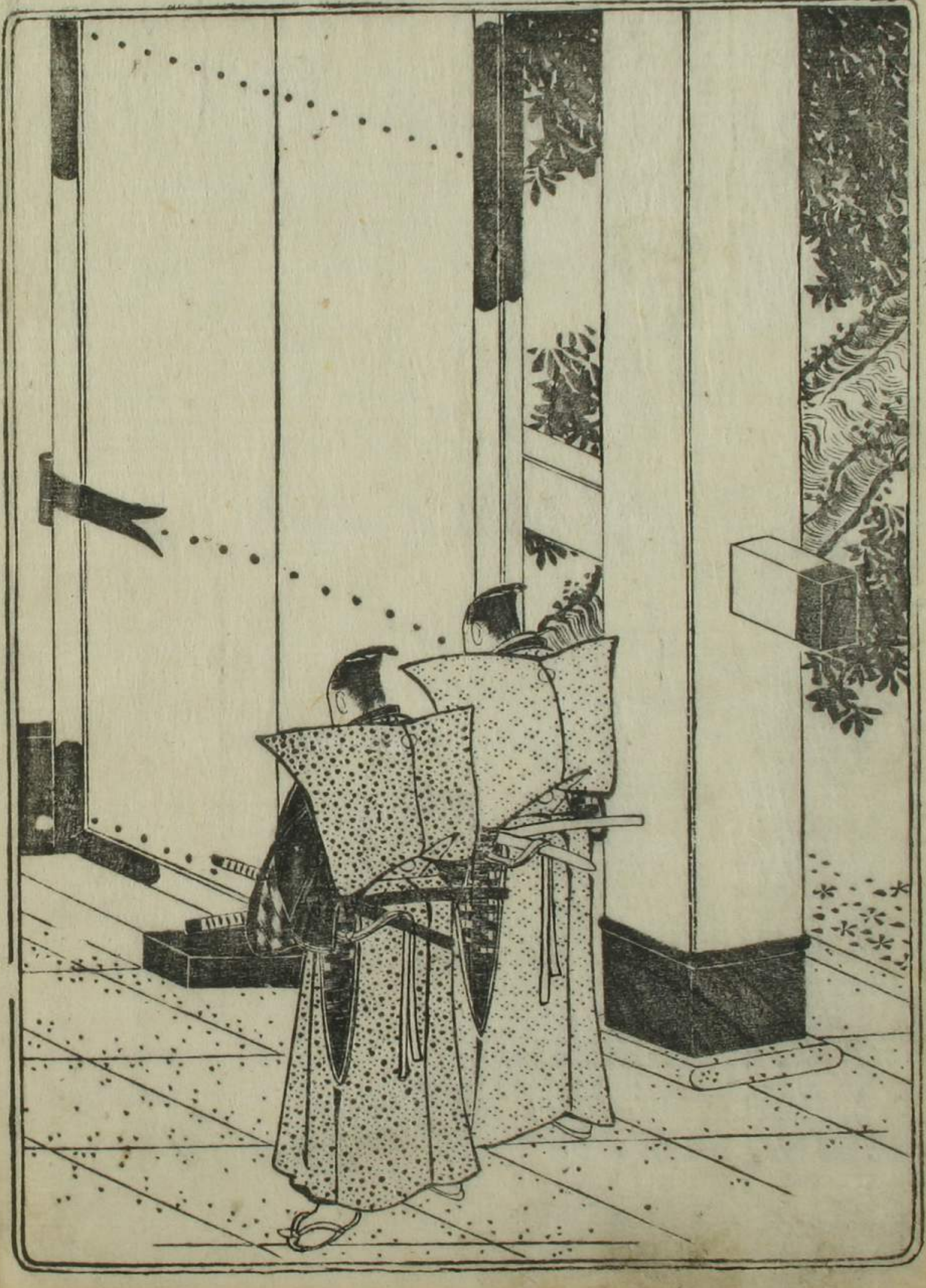
まき主君まぢみハ。あ。し。さ。ま。小せう罵ののせて。ハ。あ。ら。勿な休やすか。し。と。は。つ。し。と
 と。い。で。今いま虎とら橘たちぬ。の。仰おほ寸すんと。ころ。一いつと。知して。ハ。ま。ど。そ。の。二
 奴やつ志しら。ぬ。と。い。ふ。もの。な。り。如ごと何なにふ。と。か。ま。ば。お。ほ。よ。そ。風流ふうりゆうの。道みちハ
 詩うたも。歌うたも。雪ゆきハ。花はなハ。比ひら。へ。花はなハ。雪ゆきハ。と。り。ま。し。て。こ。そ。幽ゆう
 玄げんなる風趣ふうしゆとも承うけハ。ま。は。ま。を。一いつく。その。例れいハ。引ひて。い。と。ん。お。ハ。其その
 數かずか。ぎ。と。い。あ。る。べ。う。ら。ず。た。ぐ。その。最膾炙さいわいしやく人口くちお。る。もの。ハ。舉あげ
 て。中ちゆうハ。人ひと唐詩たうしハ。去歲きょさい薊けい南梅なんばい似に雪ゆき今いま年ねん薊けい北ほく雪ゆき如ごと梅ばい櫻おう
 ちる木きの下した風かぜハ。寒かむから。で。そ。ら。に。あ。る。ま。ぬ。雪ゆきを。ふ。り。け。る。雪ゆきハ
 少すく死し。と。ぬ。奴やつ花はなハ。い。あ。ま。り。ぬ。る。俚言俗趣りげんぞくしゆよ。て。い。づ。く。ふ。お。し。志
 ろ。と。味あじハ。い。の。侍さむらる。や。い。う。ふ。や。い。う。お。と。と。ち。ふ。た。り。ふ。お。と。し
 し。小せう硬こう猾わつき。虎こ橘たちを。ま。ど。も。一いつ句くの。下したハ。い。ひ。こ。め。ら。ま。た。ち

菊池家の
 側室雲居の
 方香火院
 水禪寺の法
 會より来て
 たすこの侍
 女とともて
 の衣裳と襲
 とせたる



菊池家
 巻十一

十四



菊池家
 巻十一

まぢ收と消て、頓口無言おぼえど報しその面、猿の尻
ふさしふらう。自来おの房裏、おくまりたる所をかざりく
論口ふおふといへども。別室よのいふまじをてはまどり
き。短氣烈火のごとに、荒尾虎橋、おのとき怒心頭より起て
憤得て、毒火沸かえまばいゆふもあて、這奴が過失お見お
らば。又候喧嘩お仕つけ、またかよお擲、此の氣お出え
ど、多方計較は、彷徨とこしてありけるが、偶と阿蘇松が佩
刀の置所法よとづきてさし出たるお見らう。最究竟ごさん
ふまと。那邊おゆれとぐるふらきて、阿蘇松が佩刀おあしに
まうせて蹴ちらせし。佩刀おそのすく、瓦落々々と轉きたると
餘の兒姓まと手して、刎飛せば、壁は礎て、割刺と音す人々

手たきて、関とこらう。阿蘇松、慌あきお把て、おいたお死
倘こそ恩賜の佩刀おせせば、おのまやとく活ねくべきと、肚
裏よ、恚おし、とも、態と面お和らげ、縮めてぞ居たり。う、虎
橋お案よ相違し、いりよ、柔弱者ふもせよ、佩刀お蹴らまて、よ
も黙止て、おあるまじ。その咎め、ゆるお待て。刀の置やう式
小遊をし、ともて、尾鱗おはけて、罵志を辱しめ、あはよくバ
眼よ、物とせんごと。巧おねもひし、そのかひまく。今かくおさ
やうとどきたる、拳動、原来、這奴生を付たる、臆病漢よし。ぞ
つみん、その内、勢お見をうし。やとら、居丈高、ふおて。阿蘇
松お屹と、睨まへ。おのま、はいひ、甲斐おふき、蠢東西うふま、まこの
壯夫なりせば、武士の精神とつみぬる、佩刀お蹴らまて。半晌も

猶豫もべきや。我今かく無礼なかせども。起りて敵對せぬ。此の虎橋が怖まひり。何小もせよ。おれ不辨菽麥の委璧ふ。飽まで嘔きこづか。いびといへども。阿蘇松ハ聾のごとく。あくらとんと躑まり居て。いさかしくあねば。虎橋まら。欺負。おのまの腐儒者。孩兒世喬の酒家。向て。い。う。で。相闘なせん。おの生白けたる志や。面ハと。罵もあへず。扇子逆手ふらりて。阿蘇松が腮あて。仰ひけ。嘔吐と唾吐。け。い。言。語。道。斷。の。狼。藉。か。と。ど。も。官。城。阿。蘇。松。ハ。天。の。縱。せる。寛厚の性か。ま。ま。あ。い。こ。そ。一。生。懸。命。の。期。か。を。倘。御。供。前。に。開。が。し。私。闘。は。身。成。果。さ。ば。屍。の。上。に。耻。の。こ。さ。ん。鬼。ま。か。く。堪。忍。と。ろ。ふ。志。う。ず。と。胸。の。忿。悻。な。お。し。鎮。り。お。し。ま。づ。り。虎。橋。

ぬ。い。お。い。あ。や。り。か。る。雜。言。う。か。無。礼。戯。も。場。所。ふ。ら。べ。し。這。里。ハ。御。供。さ。ま。小。侍。に。ち。と。ハ。御。遠。慮。あ。ら。べ。し。と。側。首。背。向。鼻。紙。と。う。で。唾。ぬ。く。へ。る。い。と。老。趣。き。舉。動。な。り。虎。橋。ハ。呆。ま。う。つ。り。げ。一。向。の。烏。龜。め。己。が。悻。怯。な。掩。い。ん。と。て。車。は。虚。托。ま。う。ら。ら。め。と。い。い。と。見。く。び。り。や。と。ま。阿。蘇。松。御。供。さ。ま。和。主。ま。か。ら。ら。う。か。い。ふ。殿。堂。ま。で。お。ま。を。不。と。ま。で。よ。耻。辱。な。う。け。洗。ゆ。垢。と。し。と。も。お。ま。ハ。ず。こ。が。無。礼。な。得。咎。り。ぬ。い。沙。汰。の。か。ご。り。の。鄙。妻。女。の。腐。は。と。ろ。ふ。も。劣。ま。り。そ。ま。お。ふ。ん。ぞ。や。日。比。汝。が。父。廉。助。が。嘴。く。聞。く。小。几。武。士。こ。ろ。も。の。平。生。ハ。文。道。ま。で。身。成。脩。ひ。ま。ど。も。ま。さ。り。こ。あ。ア。て。ハ。君。の。馬。前。ま。で。大。敵。な。う。ら。擽。き。粉。骨。な。は。く。と。ん。よ。ハ。武。

藝こそ肝要かまこと。ほねよ刀法鎗術の用心な訓と
 よし。聞と見とい、裏表今この弱息が臆病な見もば。
 庶助とて高の志をた木葉武者驚破敵ととる時ハ
 瓦多くくと戦出し、たちまち見崩して。一番は逃走るハ
 治定なり。武士の風上よもあつとぬ族よて。禄賊ともい
 べいと。出放題なる悪口雑言このと死にいたり。阿蘇松ハ
 所謂堪忍囊の緒なきら。不どくしたやうあへどして。た
 ばえど髪の毛天さま小堅敦固あいて。適間より御坐ちうれを
 憚用捨ておけばはきあがり。方量しふき無礼の段々。武士の
 魂は土足ふけ刺さへ人の面は巷とく。思多も君死とに
 父ハ種々の悪名なけけして。人面獸心の國賊めと。思

さま罵うへ。もとや聞をとてハ一分たす。弓矢八幡ゆるを
 まし。いざ尋常は勝負せよと。飛志とつて身がまえせーが。や
 よ待虎橋汝と。今這里よて討果さば。大切の御法會といひ
 消淨の道場は血が落さんハ思をあら互に死ても不忠の遺
 恨いつそ明日壺井の松林よて。潔く勝負な斐し。本事の
 ほどは見とべいと語は。ハ虎橋呵々とうちとらひ。放屁
 阿蘇松ふんぢこの場なひ脱て。今宵のうち小逐電せんす
 肚裏その手ハ喰ぬぞ。逃バとして小がさうう。真の武士のみの味一太
 かうけて塩梅よと。佩刀をろうりと抜とふし。おどろあがつて阿
 蘇松が真甲らげ。売竹割と切はけたり。明晃々志とる刀の
 ひり。巴は咄嗟と見えたるが。當下阿蘇松飛鳥のごこく虚

閃一閃とかい。扇子がもつて丁ど打。佩刀のからりとにち
たまけ。並居見姓等こまが着て大半虎橋は荷擔とは。
阿蘇松が中にとり圍芽ぐぬの鉋脱はきこ。八方より討て
かふる。阿蘇松賺とす。落たる刀把手も見せず。虎橋が短刀
ふてうちびうふ斜ひよとびちうへて。那の剛敵の虎橋とやと
一声。大袈裟は劈斃せば。鮮血熱と流して。紅梅伴の紅梅の
花がちらせるとくお。その騷動おほうたおらず。瞬くうち
小人影馳あはせり。矢庭は阿蘇松がひききとへ。血刀もたより。
屏風もとり圍嚴重に警固なまし。まう一頭は乱騷ぐる
兇性ともな欄住。ことごとく手囚ふましつ。菊池殿のよし
聞し召おほき小驚うせたまひ。そのまゝ阿蘇松が勘察役の

者よわげけらも。縁故が委細問糺さしめたまふ。頭殿は
いがる不意の椿事いできて。饗膳はまた央ふらざる小掃
興したまへ。忙しく供觸がはたへいそだ寺門が互出ら
ま。歸駕が促がし。後ひける

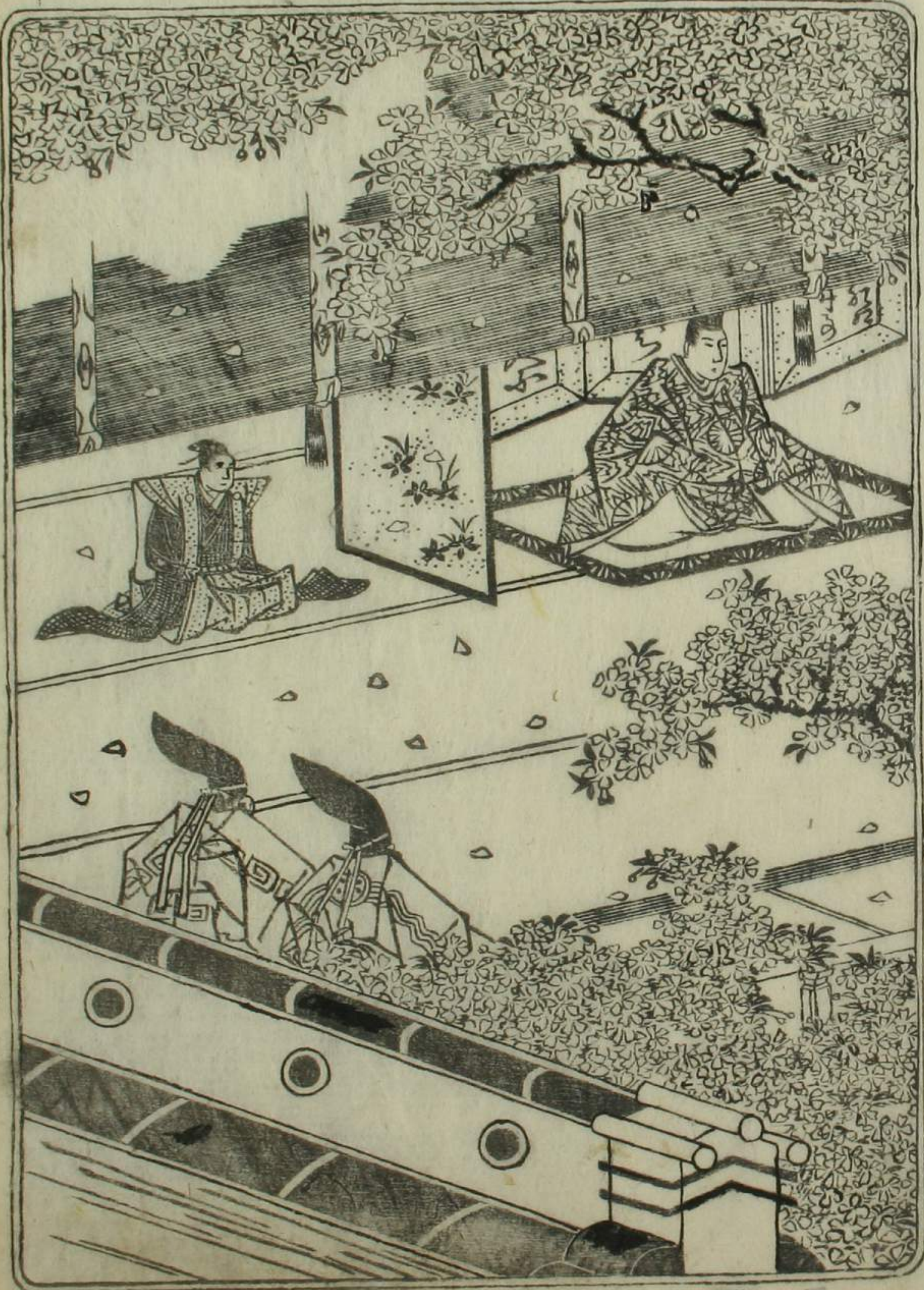
○三回 鷲

名たるる月の痴雲のためよひり。色失ひ。色ゆく花の。
狂風は香がむさうす。美玉砕けやとく。甘泉竭
やとさるほじ小勘察吏の人々。荒尾虎橋。宮城阿
蘇松。刃傷の一作。逐一は査糺がとげ一千人の口單と
またりめさせて。執政吉弘市正よと一出一。おは詳よ
車の容子が申て。その發落をぞあいまちける。吉弘市

正ふまに聞て頃も裁断ともふらうね。執左思右想も。初虎橋よりあつけたる喧嘩にて。ふと小種々の雑言と吐き。剩とへ上の事までようせし。一条國老の嫡々小の似げかき不敬。さまで今その人死せし上り別罪。お問べきよしもなし。まゝ阿蘇松ハ最止事を得ず。さて討果せしけぬまば。その罪軽き小似たまども。同僚ハ殺害せしめと明白なり。まゝ故死式目小據て。喧嘩両成敗とし。阿蘇松とバ武法小まうせて自盡ふ。さあめん小のさあらバ公正なる制度からん。まゝなり。まゝなりと計軟し。つて。誥朝御館ハ出仕なまし。君侯ハ見えて言上るやうに。昨十八日御香火院の御法

進よたいて。荒尾虎橋。宮城阿蘇松。刃傷の儀。精細し。明はりまつて。律例ハ查侍べるよ。如此の定法と一般に。得ハ虎橋ハ屍ハその父彌平左衛門へ下さま。葬式を遣。又阿蘇松儀ハ古例のおとく。賜劔おせつけらま。さるべくいひん。いと伺ひ。菊池左馬頭殿。まを聞。せらま。勿心地御氣色。かり。御顔色真青。ま筋もたら。て。御眸ハと鋭。見えさせたまひ。市正。ごいひ。果さ。るよ。つと起て。奥ふり。く。駈入た。市正。の御光景。見。る。より。果。ま。て。半。晌。口。ハ。開。う。す。こ。も。全。く。君。侯。の。御。心。小。ハ。阿。蘇。松。ハ。助。け。た。く。思。召。あ。え。な。り。と。猜。し。ら。ゆ。へ。自。來。忠。直。の。人。お。ま。は。じ。が。裁。判。の。未。熟。な。る。こ。と。を。

池上の花を
賞して菊池
殿香爐峰
の雪ハハス
叫びなまし
羣臣その意
を解せず阿
蘇松ひとそ
まを悟り
茶道とて
簾子ハ捲
まひ



知^し且^{かつ}ち^ぢ且^{かつ}お^おそ^そま^ま、そのま^ま御^ご殿^{てん}な^なま^まう^う人^{ひと}出^で私^し衛^ゑ
 小^こ田^たて^ても^もろ^ろど^どく^く寝^ね食^{しょく}な^なや^やと^とん^んせ^せず^ず、多^た方^{ほう}あ^あん^んじ
 づ^づら^らひ^ひら^らら^らぐ^ぐい^いづ^づま^ま君^{きみ}侯^{こう}の^の御^ご内^{ない}意^いな^なう^うか^かぐ^ぐひ^ひ見^みん^んと^と教^{たう}田^{でん}
 出^で仕^しな^なお^おせ^せど^ども^も、ご^ごま^まに^にけ^ける^る幹^{かん}辨^{べん}ど^ども^もい^いつ^つも^も御^ご不^ふ例^{れい}、
 この^{この}い^いひ^ひつ^つご^ごて^て御^ご逢^ああ^ある^るこ^こふ^ふ、ふ^ふま^ま小^こよ^より^りて^て椽^て吏^しの
 も^もの^のぬ^ぬし^して^て夥^{あま}の^の帳^{ちやう}簿^ぼな^な閱^えせ^せ、その^{その}例^{れい}や^やあ^ある^ると^と、只^ひ顧^ご
 穿^{せん}鑿^{さく}と^とも^も、別^{べつ}よ^よさ^させ^せる^る異^い議^ぎも^もか^かけ^けま^ま、市^{いち}止^とま
 と^とく^く叫^こ苦^く、眉^{まゆ}頭^{かみ}卧^ふ蝨^しな^な起^おき^き来^き、と^とま^まか^かう^うと^と内
 肝^{かん}膽^{たん}な^な悩^{なや}ま^ま、齒^はな^なさ^さへ^へいた^たむ^むる^るど^どう^うお^おら^らる^るよ^よ、お^おの^の夜^よ
 一^い夜^よお^おも^もひ^ひ躊^{ちゆう}躇^{ちゆう}て^てあ^あも^もね^ねら^らま^まず^ず、獨^{ひとり}燭^{しやく}な^な焚^たき^きて^て且^{かつ}な
 待^{まち}ら^らる^るぞ^ぞ、猛^{もう}然^{ぜん}手^て段^{だん}な^なお^おも^もひ^ひほ^ほま^また^たま^ま、お^おの^の手^て段^{だん}と^とい^い御

側^た室^や雲^{うん}居^ぐの^の方^{かた}の^の世^よは^は勝^{かち}ま^また^たる^る、怜^{あは}れ^れの^の性^{さが}な^なり^りな^な聞^き知^ちり
 居^ゐよ^よど^ど、お^おま^まよ^よ便^たり^りて^て私^し下^げよ^より^り君^{きみ}の^の所^{ところ}思^{おも}ひ^ひ規^きひ^ひ聞^きや^やと^と。
 ひ^ひそ^そり^りに^に廣^{ひろ}敷^{しき}小^こ手^て蔓^{むす}な^な索^{さく}り^りて^て、その^{その}お^おと^とな^ない^いひ^ひお^おと^と門^{かど}
 嚀^{なげ}、頼^{たの}み^みけ^けま^ま、御^ご側^た室^や小^こも^も快^{こころ}く^くう^うけ^けひ^ひき^きた^たま^まひ^ひけ^ける^る。
 お^おの^のゆ^ゆべ^べ菊^{きく}池^ち殿^{でん}、蘭^{らん}房^{ぼう}へ^へ入^いら^らせ^せた^たま^まよ^よ、雲^{うん}居^ぐの^の方^{かた}百^{ひゃく}般^{ぱん}
 心^{こころ}な^な費^ひや^やし^して^て豫^よめ^め設^{しやう}け^けな^なう^うと^と、美^ひ酒^{しゆ}佳^か有^{ゆう}ハ^ハさ^さら^らる^る。
 吹^ふ彈^{たん}の^の興^{きやう}な^なと^と、催^{もよお}と^とせ^せた^たま^まひ^ひ、御^ご機^き嫌^{けん}う^うる^るハ^ハく^く見^みえ
 と^とせ^せた^たま^まよ^よと^とり^り、御^ご話^わの^の蔓^{むす}よ^よほ^ほま^まきて^て、過^とり^りお^おる^る見^み姓^{せい}供^{こう}
 の^の事^{こと}あ^あり^り、對^あ手^て阿^あ蕪^わ松^{そう}ハ^ハい^いう^うか^かる^る御^ご所^{ところ}置^おき^きよ^よう^う行^いか
 ハ^ハせ^せた^たま^まひ^ひと^と、何^{なん}氣^きか^かく^くら^ら問^と見^みた^たま^ま、頭^{かぶ}殿^{でん}き^きま^まし^しり
 と^とも^も、お^おれ^れバ^バ、い^いま^まど^ど何^{なん}と^とも^も家^か老^{らう}ど^ども^もと^とり^り、申^ま出^しど^どと^とは^はり

仰せてまゝ餘の御話も轉て止むぬ。そをより君成らせ
たまふと云ふ。雲居の方。とりふふきてまのこと。又規がひ
たまへ。いつもたふ。御應なり。一々雲居の御方。君に
向てせたまひて。妾ふとれもひ出せ。おとのこへる。妾が
御貫の知りぬすおとく豊後の府内にて侍るが。妾いまだ
いとけぬきとれの奉よて。國司大友右近將監さまへ近習
が動り。高階源藏とつもの。さふらひ。恰ど此度の
おとく互は意氣地の論口より。六の源藏當坐一人と斫
殺し三人は傷にけり。巡檢の吏役拘到て。縁故を精く
糾明せ。源藏もとより二ぬき忠直のしめよて。私なく
奉仕けるゆへ。那の邪人ども。君の御前より。いと妬み。下

城の途は待ふせ。不意討ふせんとして。反て渠がたり。言
を。とつこと。證據分明。ふるふより。國司の御裁判。那
源藏。小百兩の首價。出させ。おとく。吊ひ料として。死
者の妻子。ふらご。とま。残の者ども。御叱よて。結案侍り
ぬ。と。は。む。ら。ふ。もの。か。た。ら。ひ。た。ま。へ。菊池殿。聽。て。の。こ
ナ。ム。バ。呼。その判断。いまだ。宜。きは。慥。き。よ。い。え。べ。う。ら。す。
喧嘩。兩。成。敗。と。つ。ま。あ。し。古。り。の。式。法。は。あ。ら。ど。や。雲。居。の
が。膝。に。お。と。め。さ。れ。て。その。源。藏。へ。ハ。切。腹。お。な。せ。は。け。ら。る。
ふ。殿。御。頭。に。縛。せ。た。ま。ひ。否。く。卿。の。ま。う。さ。ろ。く。通。な。ま。は。
その。源。藏。と。や。ら。ん。誠。忠。無。二。の。者。ふ。る。べ。し。さ。ま。い。その。忠
臣。が。欺。殺。よ。せ。ん。と。せ。し。惡。黨。等。と。一。般。は。裁。許。ま。べ。主。人

○七二

ハ事ニ聞一と世ニ誦らま。臣たるもの志を以て見。以来
忠義を勵むのあらど。雲居の方い。あやま。その志を
源藏の御助ふ。さる。が御政道。かまひとべる。ふや。殿
仰すらく。ま。ら。ず。は。ど。り。ま。し。つ。ご。と。く。助けてハ國法
たちがたし。予。が。たり。ふ。旨。の。その源藏とやらん。其勘當
ま。て。領内。か。ま。い。追放せしめ。死者ハ名跡とたて。つり
り。荷擔の者等ハ急度叱。過て改むべき。利解。と。か
そ。ま。せ。か。ん。か。く。せ。ハ。大。概。寛。仁。の。制。度。た。る。べ。し。雲居の
方。の。御。旨。を。聞。て。暗。々。地。よ。ろ。お。び。ま。た。し。四。表。八。表。の
御。か。た。ら。い。ふ。お。り。て。その夜ハ。さ。き。て。帳。内。も。ま。り。や。り。お。り
し。と。ぞ。吉。弘。市。正。ハ。雲。居。の。方。より。御。内。意。を。は。た。へ。聞。

ハ。ろ。ろ。づ。て。し。か。き。ま。さ。し。か。く。て。市。正。ハ。詰。且。御。館。に。出。仕
か。ふ。し。執。謁。を。願。け。ま。バ。へ。ち。早。く。御。召。出。し。め。り。ら。り。市。正
ハ。御。側。室。の。内。意。を。含。て。官。城。阿。蘇。松。追。放。の。こ。と。と。窺。ひ
た。て。ま。し。ま。バ。菊。池。殿。た。や。と。く。御。聞。を。お。し。め。ら。せ。ら。ま。し。ま。り
く。ら。へ。の。御。誼。を。市。正。慎。て。承。り。し。そ。の。ま。ま。し。の。由。と
役。筋。へ。申。渡。し。ぬ。市。正。ハ。さ。し。の。疑。獄。の。頓。に。結。案。よ。お
し。し。ひ。し。へ。ふ。雲。居。の。方。の。御。庇。を。お。し。と。か。た。し。け。お。り
た。も。ひ。且。その。發明。を。感。じ。ける。その。後。菊。池。殿。斐
翠。帳。へ。入。っ。せ。ら。ま。し。御。機。嫌。よ。く。や。よ。雲。居。の。阿。蘇。松
と。い。長。の。暇。を。と。らせ。追。放。せ。し。と。前。日。卿。の。虚。談。を
出。來。た。と。仰。せ。ら。ま。し。ける。と。ぞ。と。こ。の。菊。池。殿。へ。り。み。れ

八かゝまで阿蘇松が助けたくねばせしと、其奥意をく
 へしく原ぬまは、あまより先、菊池殿水禪寺の智遠慧
 長老がまねらせらま。密にまを内意がおほせらま。近
 臣どもの相が看せしめたまふ。長老一々看すていへらく
 個とも骨法凡庸ふとべし。そまが中、宮城阿蘇松のま
 希代の神相よて、その前途たのもしくふもひもへる。渠へ
 王佐の才が具したる人傑よて、後来世が濟ひ國が利し
 天下の至寶とぬるべきものなり。ままども惜べし一個の
 欠穴ありて、十四五歳の際、不意災星まあひて、かか
 一命も保ちかたうらん。倘天幸を得て、ふの大難がま
 免うまたらま。かば、渠が功名成就とべきふと、密に

嗟嘆がせらせける。菊池殿仰すやうさあらは如何ふ
 ちて助てま。長老拂子とりぬほし。天機洩とべらさ
 とを應らまける。菊池殿このとき長老の筭語が記
 得居たまひて、年頃試見たまふ。近臣等が身の上の吉
 凶、何の違はずして、符節があはをるがふとくぬり、旧より
 ちうあるべきもづり、那の慧長老といへる、震且國揚子江
 なる金山寺よて修煉せらま。高僧よて、風鑑ふとま
 た比ぬく人の禍福が指すま。と、淵鑑がふし。おん
 ふまふよりて、菊池殿あまの田し阿蘇松が事起し
 とき、渠が齡丁と十五歳なるゆへ、長老の風鑑その驗
 あること、神のごくぬるが感服したまひ。世の利益の爲

成おぼしめし、幸志て助けとらせたまひしハ、依估おき
ところ明白にて、私よその徳果に貪たまぬ證據ハ、御
膝下よ召使いませず。自國の利益のたりふ志たまはざる
小てんか知るべし久後ふいたまはる。阿蘇松、駒澤某
と喚ま、非常の功蹟にたて、その名に海内よ震ひし時
菊池殿くしめて市正ふかくと明こせたまひしとぞ。さ
の夜雲居の方へおほせらまし御話といひ類なき賢明の
君ふそりし、そま虎豹の兎いまた文にかとすといへ共
しや牛に食の氣勢あり、さるをどお、勘察衙門よ囚こ
めかりまたる宮城阿蘇松ハ、志かく人殺せしうへ露
ばうまも命のむいらんとおりの、未練の心ハかけまとも大

罪に犯せし身の私よ死路を求むるハ、上への恐怖おぼ
まもあらず、くや、公裁にまらして、嚴科小處せらるべしと
とくより髻にむらとせ、最後の觀念潔よくぞ見之小ける
浩所よ上使入来て、君の嚴命に演追放仰にけらる
旨いひこせハ、たぐち小護送の健卒ども、無刀の阿蘇松を
ひつたて出づ、阿蘇松よゆらたもひもぐけず、からき露命と助
かして、ぐちや除名の身の、うち萎まはく、まの衙門とそたら
出ける、くろおき行路の人も、おの光景に見て、總て衰を催せり
かくて阿蘇松ハ、行こと十丁あまひふして、官橋の上より、廻ふ
御館の覺に望んで拜成かし、君の大恩に謝したてまつり、
正しく再生の父母なりと、感激涙堰めへず、おの期ふおよび

荒尾虎橋
 同僚官城
 阿蘇松が
 寵遇あつ
 死をねた
 事よ托つ
 無礼とほ
 多方悪口
 吐て罵辱
 り逐一大
 椿事と惹
 出す

阿蘇松が寵遇あつ死をねた事よ托つ無礼とほ多方悪口吐て罵辱り逐一大椿事と惹出す



阿蘇松が寵遇あつ死をねた事よ托つ無礼とほ多方悪口吐て罵辱り逐一大椿事と惹出す



阿蘇松が寵遇あつ死をねた事よ托つ無礼とほ多方悪口吐て罵辱り逐一大椿事と惹出す

ても嫡親嫡母な一目だも遇まよくもへど。とても遂しぬ
時機ふまべ。げよ武士の上不ど悲しきものハあらトとなぐ
女々志くも涙うちかき。彼三閭太夫が澤畔よ吟行うち
志て。ほどぬく菊池の城下なふもける。東の郊坳ふる分界
堆子なかぎをる例よや。警送の健卒どもハ這里しり。阿
蘇松なひ放ちていつ回しぬ。阿蘇松ハ屠所の羊のおもひ
なふし。徐々としたどりけく。やぐて岐ふす路の邊の石敢當小
ちうづき。但見をば妻手ぬる緑叢樹の透間より。一道の茶
の烟たちふびきていと冷静たる荒廟ぞあらハきたる那方
よりむらしとたちいで。阿蘇松な扯とめ。別もな
惜めるともからハ日比親しなかぎ。よて。適間より集

合居て起程な見送るよぞあて多きとど骨肉のものとしハ。
上かよかして出で来らざるふ。阿蘇松ハ人々小請
をて。茶店小尻うちかけ離盃なくも。ハいとほど小後馳
ふとせつきたる従者がさし出せる花布の袂包な不どね
袷うち着てア。さく旅装なふし。差替の双刀な佩て。
編笠な左小もち。こやこりな告げてうつ起ハ個々涙
の袂なこりちける。宮城阿蘇松をまより。ひたもの東
さして歩行けるが。阿蘇の御嶽ハ道の便といひ所願も
あまばいざ詣でむやと。峻しき羊腸道のほまつ。たよそ
麓より半腹まづ。百千萬億古木たちこめて。そまが間
間。山櫻とものさたま。またるが。花ハとふちア。て。

ふぶりのかきとめる嫩のふどそこの浅翠なる小のどろぬる瞳
 影さしていとまむちく斜風うちそよくをその葉末の
 滴は抽ぬ濕寸。おの昨の雨の記念ふるべし。蘿はすげま
 梯は攀て辛じて宮屋はいたまはきぬ。葦地は
 粘印たる花片は残香かぬあまやふーやえー
 まぬ鳥ども。むをほくさへづもども。樹かくきて人
 ちりよらす。深窓はどろしと岩激泉鳴嘒ぐり。石
 の華表は幾個もえ来つ。長命燈も不のありてと
 とろふ神くま。聽て岳廟は進香廡下の砂地は
 額杖突き祝詞して賽はなおせば。おまから神樂の
 音さへ訝していとすげけぬ。心ちくやく小をまら

徘徊けるが。例の詩の口裏は衝いづるまじく。腰は佩ひ
 たる墨斗とろで。柄短き毫して瑞籬の瀑たる間に
 題つけぬ。這方の大官司は姻族かまは。やをら尋いたまは。
 卯の花の垣根は戯遊る。男の童の阿蘇松は熟面たる。
 たぐ一目見るより。そのゆく驅入てまは案内官司忙ハ
 まく出むへて正廳は請。闔門たうりて款待々積る
 説話よその夜いといたう更て。やうやく臥房は入ど。
 短夜のぬらひ。こやくも山鶴の啼きたる。夢さへ結び
 あへて。朝まどねは起出て。粥ふど啜完旅装ひ刷るひ。
 いしゆまうしてま出まは。官司親屬はも袖袂は纏りて
 拽とむ。阿蘇松いへらく厚意かまけぬ侍もど。御勘

雲居の方
 長臣市正
 小たのよし
 殿の御成ご
 心孤つや
 て見姓阿
 藤松が裁
 許の御内
 意とら
 ひたし



當の身の上ぬをば一夜といへども御堅近死あたりに長居せ
 んへ思ふふきよあらずし。固推辞ひよもど。大家けよ夫は
 理よとちもへびさらふ苗ゆん法もふくいと。別をぬ惜と
 けよかくて阿蘇松の宮司が宿ぬたちいづも。夜は已よ
 明とふきたまど。木だち深き山奥ぬをば。天色ふほ不
 のらら。雲のたえ間の星輝よ透見て。岨路ぬくたうと
 ある巖頭よ立て。老樹の隙より見ねろせば。有明月のち
 かたよ。菊池の御城とふぼく。粉墻朦朧仄見けるよ。多媽の
 在所ふまは直よ膝坐てふ。拜ぬふとより先ハ山又山ふ
 こけいよ。バふをこそとが故郷の見終ふと。とどろよ。腸
 ぬ断おしひせ。刺脚下より山鶺の二声は。啼たつとせ

すこしも哀ぬそへて。眼ぬまむたき。郭公ハ不如歸と
 啼しのと。こまの罪ある放逐の。帰る由ぬき身の上とく
 やと歎きつ。しむるとも。血のふいたとを墜しける。そま
 より宮城阿蘇松ハ。八重よへたつる山河ぬ跋渉はくし
 つきしてふとぬ。豊後の國鶴崎といふ地方よ。いたまら
 ぬの湊よ。便船ぬをてうちの。一路順風潮。日あ
 らずして周防の國降松の浦よ着ふける。這里より大
 内殿の城下山口へハ。早路ゆくところふて。とやその程も
 遠からずとぬん。

あはるは元をく一

